那須与一伝承館通信〈第20回〉

◎伊達政宗書状

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、伊達政宗書状を紹介します。

天正十八年（一五九〇）三月、豊臣秀吉は小田原城に拠る北条氏政・氏直父子を討つべく、関東に出陣しました。その際、秀吉は全国の武士に従軍を命じます。

これに対して、伊達政宗（一五六七～一六三六）・那須資晴（一五五七～一六一〇）は、すぐに秀吉のもとに参陣しませんでした。それは、両者が秀吉に対抗すべく秘かに同盟を結んでいたからでした。『伊達貞山公治家記録』には「（三月十七日）入夜、那須ヨリノ使ニ御目見仰付ラル」とあり、政宗は那須の使者に対面したことがわかります。おそらく那須氏に対して出馬要請があり、資晴はそれを政宗に知らせたのでしょう。

これを受けて政宗から資晴に宛てられたのが、今回の書状です。内容は、①出馬延期のこと、②世上に関わらず協力すること、③今後の軍備のことであり、政宗から資晴に協議を申し入れたものとみられます。日付の下には、「威伝」と彫られた政宗の朱印が捺されています。

しかし、その二か月後の五月には、政宗は小田原に参陣し、遅れ馳せながらも秀吉に帰服を誓いました。政宗は「秀吉の力には抗えない」と判断したのでしょう。

政宗が帰服し、やがて小田原城の北条氏が降伏すると、那須氏もまた秀吉の旗下に下らざるを得なくなりました。こうして長い戦国時代にも、ついに幕が引かれたのです。

○伊達政宗書状

覚

一、出馬延引之事、口上段々

一、世上浮沈共ニ尽未来御入魂之事、

一、当備之事、

以上、

三月廿一日　（朱印）印

那須殿（資晴）

伊達政宗書状
（那須家所蔵・当館寄託）

伊達政宗朱印（『図説 戦国武将１１８』より）

■問い合わせ
那須与一伝承館
TEL（20）0220

彫刻周遊 41

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

この彫刻は下石上公園の駐車場の最も北にある作品です。

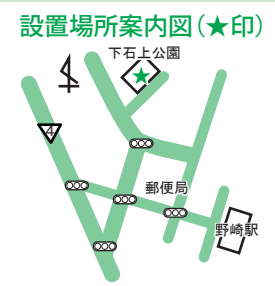
高さも色も異なる２本の四角柱が建っており、その両方に無数の均一な直線が無作為に彫り込まれています。この二本の石柱は『石をダイヤモンドカッターで切断するときに、下敷きになる木の柱を表わしており、無数の線はダイヤモンドカッターが石を切った際にできた傷を表わしています。

Bound（躍進する）
クリスチャン・ヒンツ
日本　　2003 年

全く違う状況で生まれ成長してきた人でも、ある時期に同じような場所で経験を積むと、その経験が調和のためのきっかけになり得ます。「石の表面に刻まれた傷」を「いくつもの経験」に見立て、「それこそがまさに、人物の調和と関係が始まるところ」だと作者は強く語っています。

クリスチャン・ヒンツ 氏

作品名の Bound には、『境界』や『（ボールなどが高く）跳ね上がる』などの意味もありますが、この作者の想いを考えると『躍進する』が適切かと思われます。



作者はドイツ出身のクリスチャン・ヒンツ氏。ミュンヘン大学、東京藝術大学に在籍しました。母国ミュンヘンで活動をしながら、京都や茨城で開催されたイベントなどにも参加しました。

■問い合わせ
文化振興課文化振興係　TEL（２３）８７１８